

ユング心理学的観点から見た『永遠の贈り物』の意義について ～ペット供養の現状と絡めながら～

白田 信重

2012. 10. 18 ユング心理学研究会

ローレン・マッコール『永遠の贈り物』におけるアニマルコミュニケーションとは、著者がテレパシーで死んだペットの霊の言葉を聞き、ペットの飼い主だった人との対話を行うというもので、自然科学的世界観をベースとする現代の一般的通念からすれば、にわかには信じがたい内容である。相手となる対話者が本当に動物の霊であるのか、それは一種の変性意識下における心理現象でしかないのではないかと、という疑問も出てくるであろう。

しかしながらここでは、そうした疑念を括弧に入れて保留し、そこで実際に行われている事柄の意味に注目をしてみたい。アニマルコミュニケーションは、いわゆるペットロスの状態にある人々に対して一定の癒しと指針とを与える役割を果たしているが、従来のペットロスに対するアプローチとは異なる特徴を持っており、現代におけるペットと人間との関係を考えるにあたって重要な示唆があるように思われる。以下ではペット供養の現状と絡めながら、本著作の持つ意味について考えていきたい。

● 近年におけるペットと人間との関係の変化

歴史的に見た動物と人間との関係は、野生動物 → 食用動物、使役動物（家畜） → 愛玩動物、という順で新たな様相が生まれてきたとされるが、最近に至って新しい関係がこれに加わってきた。それは「伴侶動物（コンパニオン・アニマル）」と呼ばれる、家族の一員としての動物の位置づけである。この状況に対応しているのが、ペットの死に伴って抑鬱的な状態に陥る、いわゆる「ペットロス」の出現であり、ペット供養の増加である。

1967年にホームズとレイが作り出した「社会再適応評価尺度」は、日常生活上の様々な出来事から受けるストレスを、配偶者の死別を100として尺度化したもの（例えば離婚は73、軽微な法律違反は11）であるが、その43項目中に「ペットの死」は存在しない。この時代には、ペットの死はあえてストレスの源泉として取り上げるほどのものではなかったことが示唆される。

日本においては、多くの経済指標がピークを迎えた 1990 年代半ばから、ペットに対する日本人の姿勢に大きな変化が現われた。ある調査によると、ペットを家族の一員として考えると回答した人は、1991 年には 35%だが、2001 年には 85%と、10 年間で急増している。

いずれにしても、これら人間とペットとの関係の変化は、ごく近年において生じてきたことがわかる。その特徴は、ただの愛玩の対象にとどまらない、動物への心理的な近しさや思い入れであり、対象への人格的な投影である。

● 「伴侶動物」の登場と、家族のあり方の変化

従来、動物は人間にとって自然的な対象物という位置づけであったが、現在のペットにおいて動物は情愛の対象となる人格的存在であり、「家族の一員」といってよい位置づけに変化した。これはつまり、自分と切り離された対象物であったところから、自分に近しく、自分の周囲を構成する一人格として投影を受ける存在に変化していった、ということである。実際、飼われるペットの種類に関しては、昆虫や小鳥などの小動物の割合が急激に減少し、猫や犬のように、家族的な関係を投影できるような動物の割合が急増してきている。

本来は人間に対して求められるはずの「家族」としての要素が、ペットに求められるようになってきている。家族が崩壊していると言われる一方で、「家族的なるもの」はむしろペットに投影されるようになってきているのではないかと思われる。(仮に実際の家族から逃れたとしても、我々は元型的な「家族的なるもの」からは逃れられない存在ではないだろうか)。

「本当の家族」は肉親ではなくてペット、という人もいるであろう。バラバラになってしまっている家族の人間関係の中で、人間関係の軋轢もなく無条件に自分に懐いてくれるペットがいるとしたら、はたして誰が本当の家族であると思えるか、誰が亡くなれば本当に悲しいと思うであろうか。人間の葬儀やお墓が「費用のかかる無駄なもの」とされて簡素化していく一方で、ペットについては費用をかけてでも葬儀をしたりお墓を作ったりしてあげたいと思う、そうした変化はまさに家族のあり方の変化に対応している。

● 現在のペット供養に見られる諸特徴

このような人間と動物との関係の変化に伴い、ペット供養が盛んになりつつあるが、そこにも注目すべき変化が見られる。

日本における伝統的な動物供養は、仏教的世界観のもと、畜生道に生まれた動物たちを救うために行われる宗教的行為であり、その背景には死についての宗教的世界観、共通の社会的価値基準があった。しかし昨今のペット供養は、人間と動物との関係性の変化に伴い、根本的なところで動物供養とは異なる様相を帯びてきている。

内藤理恵子「ペットの家族化と葬送文化の変容」によれば、現代のペット供養においては、各々の個人が、ペットの死とその来世について各々の世界観を持つ傾向があり、かつての動物供養のようにそこに共通の世界観は存在しない。これらの世界観は、むしろ個人的な思いの表現行為であるとされる。個々が違った「自分のペットだけの物語」を所有し、それを包括する「大きな物語」が存在しない。ペット供養に伴う「ペットの死後物語」は、「センチメンタルな上に、一貫性に欠ける」、「人間のエゴが見事に反映された細切れの小さなものの集合体」になっていると指摘される。

人の死に関しては、それと向き合う上での一般的な社会的制度がすでに存在しており、それを支える「大きな物語」としての宗教体系もあり、それらが死に直接向かい合うことへの一種の心理的緩衝装置として働いている。しかし、ペットの死については現状そのような制度は確立していない。例えば在来仏教において、従来の動物供養とは異なる、伴侶動物としてのペット供養の一般的な教義というのは確立されていない。

ペットの死の悲しみについては、人は各々、直接に向かい合わなくてはならない。そのような状況下で、ペットの死についての個人的な物語が各々に語られることは、ごくごく自然な帰結と言えよう。一方で、それが「人間のエゴが見事に反映された」だけになってしまうことに懸念を感ずる向きもあるのではないだろうか。この現況は、ユングが「現代においてはそれぞれが神話を持つ必要がある」と指摘した心理的状況に対応するもので、まさにユング的問題領域と言えるものである。

通常のお墓についてはお参りや年忌法要をする人が少なくなっていると言われる中で、ペットのお墓では熱心にお参りや法要をする傾向があるという。ペット供養を行っている寺院については、通常の寺院よりも信心が深くなる傾向があるという報告もある。ペット供養を行っているある寺院の住職によれば、

「ペット供養は、仏教布教の最大の方法」である。

実のところ、ペット供養が既成宗教を変えるきっかけになる可能性も十分にあり得るのではないだろうか。ペットの死の悲しみを救い上げる一般的枠組みを、例えば仏教が新たに提示できるのであれば、それが今後のペット供養のスタンダードとして定着するかもしれない。ペット供養をめぐる状況には、一定の方向付けがあれば大きく動くような心理的ポテンシャルが存在していると感じられる。現代においてはペットに対して、非常に強い情動的内容が投影されてきている。

● ペットの死生観に対する「虹の橋」の影響力

先の内藤論文によれば、現代のペット供養において各々が「自分だけの世界観」を持つ傾向がある一方、その世界観の中にも基盤とされる物語が幾つか見だされるとされる。それは大きくは、輪廻転生思想と、「Rainbow Bridge（虹の橋）」のふたつである。

このうちの「虹の橋」とは、作者不詳の英文詩で、ペットの死に関連してネットや書籍を通して広く受け入れられている物語である。その内容は次のようなものである。天国の少し前にある「虹の橋」のたもとで、死んだペットは過ぎ去った元気な日のままの姿で心地よく過ごしているが、残してきてしまった親友（飼い主）がいないことをさみしく思っている。しかし飼い主とペットとは、ここで感動的に再会を果たし、二人で一緒に天国へと虹の橋を渡ってゆく。

これに似た「AT THE RAINBOW BRIDGE」という、これもまた作者不詳の、内容もほぼ同じ英文詩もある。飼い主とペットとが来世で再会し、二度と離れることがない様子が描かれている。

ペットを悼む人たちにとっての「虹の橋」の位置づけは、お墓否定論者において広く受け入れられた「千の風になって」のそれと重ね合わせることができると思われる。これらの詩が広く受け入れられるのは、ペットの死に関連する各々の具体的な死生観はそれぞれに違えど、それらに共通して幅広く見られる基本的な心性をうまく表現しているからではないだろうか。ここではそうした基本的な心性を、仮に「虹の橋」的心性と呼んでみたい。

● 「虹の橋」的心性の心理学的考察

「虹の橋」的心性の基本的特徴は、以下のように整理できるだろう。過去における自分とペットとの交流を、失われた至上の関係として位置づける。ペットの死は不幸なる喪失以外の何ものでもない。来世においては、その至上の状態が再度獲得され、もう失われることはないと考える。過去にあったある一定の状態を強く志向するという点において、これらは「過去志向的」と言える。

さらには、「自己延長的」という特徴も指摘できる。ペットの死という契機があっても、現世における自分とペットとの関係は変わることなく、来世でも続く。むしろ関係が永遠に変わらないことこそが強調されている。自分の思いをそのまま肯定的に死後にまで延長するが、この発想についての自己省察的観点はあまり見られない。先の内藤論文による、ペット供養に伴う「ペットの死後物語」が「人間のエゴが見事に反映された細切れの小さなものの集合体」になっているという指摘が、この特徴に重なるものである。

ペットロスに対するケアの観点からすれば、「虹の橋」的なイメージが持つ一定の癒し効果は認められるだろう。しかしながら、次に述べるような「ペットの死を通しての未来志向的な自己成長」という要素は、ここには必ずしも明確には現れていない（むしろ排除されてさえている？）。

● 『永遠の贈り物』に見られる自己成長的特徴

以上のように「虹の橋」的心性を定式化すると、『永遠の贈り物』における試みが持っている特徴が、これと対比的に明確になる。

まず第一に、ペットを失った飼い主が一方的に特定の世界観を信じて保持するのではなく、形式上はあくまで死んだペットとの対話を通じて、ペットの側から語られる世界観と向かい合うことになる。その意味では、自我による物語りとは異なり、他者との会話による新たな認識という面を持つ。この場合の「他者」とは、自分の一部であったり、自分を延長した先にある存在ではなく、自分から独立した人格的存在である。

第二に、ペットとの過去の関係はそのままでは再現されない。例えば、アニマルコミュニケーションは経験的に2年を超えると行うことが難しくなるというが、これはペットが生まれ変わって別の生を生きている可能性があるとして、「虹の橋」のように死んだペットが飼い主をずっと待っているとは理解してい

ない。ペットとの関係は、死を通して過去とは異なる形に変化していくが、むしろその変化にこそ価値が置かれているように思われる。

第三に、変化したペットとの関係に新たな意味が与えられ、大きな世界観の中での永続性が語られる。ペットも人間も、大いなる「廻る命の輪」の中で様々な異なった経験をし、教訓を得て、霊的に進化していくと考えられている。人間とペットがこの世で出会ったことには大いなる意味があったとし、ペットの死の経験を通して「永遠の絆」を認識することで互いに成長することが重要だとされている。

以上の特徴を一言でまとめるなら、「未来志向的」ないし「成長志向的」である。過去の関係が来世においてそのまま再現されることにはむしろ否定的で、ペットの死を新たな成長のための通過点としてとらえ、対話を通しての新たな認識と変化、トランスパーソナル的視点への移行による自己成長がここでは重要視されている。

● 『永遠の贈り物』に見られる意識と無意識との対話

アニマルコミュニケーションは、それを行う当人がそうと意識しているかどうかにかかわらず、あるいは対話の相手が本当に動物の霊であるのかどうかにかかわらず、心理学的観点からはユングの言うところの「意識と無意識との対話」を行っていると思われる。ユング派の臨床技法に、能動的想像（アクティヴ・イマジネーション）と呼ばれるものがある。これは無意識を人格のある存在として表象し、それと対話を行っていくというものであるが、アニマルコミュニケーションは、この技法を実質的に行っている。

この視点からは、ペットの霊とされるものは、その当人の無意識が人格化されたものとほぼ等価と考えられる。対話を行っていく中で、ペットと自分との今までの関係性を、トランスパーソナル的な観点から捉え直し、自分とペット（意識と無意識）との新たな関係のイメージを作り出すことで、抑うつ的なペットロスの状態を未来志向的な生き方へと転換していく。ペットとの出会いを「大いなる使命」の中での出来事であると位置づけることで、自我中心的な観点から脱して、自分もペットもより大きな生き方をするべく再認識が行われる。

これは、ペットの死を通して行われる、人と動物との双方における自己成長の過程であるが、この点こそ「虹の橋」的心性においては重きを置かれてない

部分である。『永遠の贈り物』の著者は、自分の行っている営為が「虹の橋」的なるものとは異なることを改めて強調していたという「(本書編集者・赤坂氏談)。そのことは、著者がこの自己成長の過程に意図的に焦点を当てていることを示唆するものである。

● 『永遠の贈り物』の意義

ペットと人間との関係が様々に変容している現状において、この『永遠の贈り物』は、その先にあるペットとの新たな精神的関係と自己成長を示唆する点において、非常に重要な問題提起をしているように思われる。それは、ペットと人間の問題にとどまらず、より広く、現代の家族の問題、人間の死生観、生者と死者との関係を問い直す上での問題提起にもつながっている。

● 参考文献

ローレン・マッコール『永遠の贈り物』

おくだひろこ監修、中央アート出版社、2009/04

内藤理恵子「ペットの家族化と葬送文化の変容」、『宗教研究』85 巻 1 輯、2011

菅原みどり『ペットのフューネラルー葬儀と供養』

PHP パブリッシング、2009/11

藤井正雄編『ペット供養・霊園整備運営実践講座』 四季社、2006/05

石田 おさむ『現代日本人の動物観ー動物とのあやしげな関係』

ビイングネットプレス、2008/06

モイラ・アンダーソン『ペットロスと心理学ー悲しみを癒すための手立て』

小杉正太郎他訳、メディカルサイエンス社、2001/05)

エレノア・ハリス『ペットロスヒーリング』 宮武恭子訳、太陽出版、2006/12

金森修『動物に魂はあるのか』 中央公論新社、2012/08